

## 「2015年近未来チャレンジ論文特集」にあたって

阿部 明典

(千葉大学)

2016年は、人工知能を題材にした小説が多く出版されたと思う。例えば、奥泉光の「ビビビ・ビ・バップ」、松浦寿輝の「BB/PP」、川上弘美の「大きな鳥にさらわれないよう」などが出版されていた。人工知能を題材にしたSFっぽい作品は、これまでも出てきているので、珍しいことではないが、芥川賞をとった純文学作家が出しているとなると、何らかの世間的流行、情勢が感じられる。内容は、各自で読んでいただくとして、さらに、こっちはSFであるが、五人の若手作家が作品を書き、それに対して人工知能学会のSFファン? が解説を書いた「AIと人類は共存できるか? 人工知能SFアンソロジー」が早川書房から最近、出版された。古典的人工知能SFならフィリップ・K・ディックの「アンドロイドは電気羊の夢を見るか?」があるが、こちらは、ややネガティブな感じでアンドロイド(人工知能)が描かれていた。

最近では、人工知能が仕事を奪うのではないか? 人工知能が暴走するのではないか? などという危惧を抱く方が増えてきている。また、2045年のシンギュラリティに関してもいろいろいわれている。ビジネス誌をはじめとして世間は、人工知能一色である。人工知能がややネガティブに扱われているのは置いておいて、人工知能がここまで話題に上がるのは、1980年代後半から1990年初頭以来なので、人工知能に携わる者としては、非常にうれしいことである。1990年半ばくらいから人工知能冬の時代となるのであるが、その間は、企業から人工知能の文字が消され、研究者も消され……全く無視されていたことを思えば、素晴らしいことであろう。

さて、近未来チャレンジであるが、その冬の時代、人工知能が役に立たない、積木を積み上げるのではなく、崩しているといわれたときに、人工知能が役に立つと見せたいという意識で、近未来(5年程度)に実現できる役に立つ研究を提案しようと大澤幸生氏(現 東京大学)が始めた企画である。数多くの卒業者を輩出(詳細は学会ホームページの卒業生の声などで確認されたい)し、その研究成果も無料のonline論文を読むことで、企業から一緒にしたいと声をかけていただいたりもしていた。このように、それなりの結果を出してきたと思う。

今回卒業した「Total Environment for Text Data Mining」は、データマイニングのツールとして開発され、かなりのユーザを集め、病院などいろいろな場所で使われていると思う。ツールなので派手さはないが、それが支えとなっているいろいろな業務ができていると考えると、その価値は高いと思う。すでに、第3種研究会でもいろいろな人が集まり、議論しているが、さらに、本学会の全国大会でオーガナイズドセッションをもつことになった。近未来チャレンジでつくられたツールとして、これからの拡張され、いろいろな場所で活用されることを願う。

現在サバイバル中でチャレンジしている研究も、災害情報支援、認知症関連、モノ・コトづくり支援など、社会的弱者の支援を行うという意味で重要な研究だと思う。これらのチャレンジが、今後、社会に役立つように展開することを祈る。